

道南地方の樹木病害虫

(針葉樹編)

館 和 夫

はじめに

道南支場で日頃取扱っている林業相談の中には、道南地方の山林、緑地、庭園など、広い範囲に発生する樹木病害虫に関するものが多い。それらの一部は、先に“函館地方の緑化樹の害虫”(光珠内季報 35, 36, 38 号)として、発生傾向などを報告したが、その後も、さまざまな病気や害虫が発生して多くの被害を与えている。道南地域におけるこれらめ発生状況を明らかにし、今後の防除に役立てるため、本稿では、これまで現場で取扱った針葉樹に関する林業相談の中で、とくに問題の多い病害虫をとりあげた。なお一部の病害虫名の同定にあたっては、昆虫野兎鼠科ならびに樹病科の協力によった。

イチイ

北海道の庭木の王者といわれるイチイは、近年、園芸ブームと共に大量に植栽されるようになり、いろいろな害虫も目立ってきた。その主なものは、7月から10月頃にかけて、葉の裏側や芽の基部に黄褐色のカイガラと白い卵のうを形成する長さ4~5mmのイヌガヤワタカイガラムシ、および同じ頃イチイやスギの葉に寄生して多数の汚れた黄斑をつくるスギマルカイガラムシ、5月頃からイチイやスギの葉を食害して6月中、下旬に羽化するマツアトキハマキ、7月中旬頃、根元付近から多数の成虫が出現して、交尾後土中に産卵し、ふ化した幼虫が9月頃根を食害して樹勢を低下させるナガチャコガネなどである。これらのうち、カイガラムシ類は5月~6月の幼虫のふ化期に、ハマキガは食害の初期に低毒性有機燐剤(スミチオン、馬拉ソン等)の標準倍液を散布すればよい。コガネムシについては成虫の捕殺につとめるほか、8月頃、幼虫の食害量が多くなる前にダイアジノン粉剤を土中にすき込んでやる必要がある。



写真-1 ナガチャコガネの成虫

(1978, 7; 函館市湯ノ川)

トドマツ

トドマツは本道の代表的な郷土樹種で適応範囲が広く、道内における最も重要な造林樹種である。また、その端正な姿は、近年普及した洋風建築ともよく似合うことから、庭園樹や屋敷林、防風林等にしばしば用いられている。しかし、トドマツは若齢の頃、夏期にトドマツオオ

アブラなどのアブラムシ類の寄生をうけることが多く、また、苗畑や幼齢造林地ではトドマツノハダニの被害をうけることも多い。とくにトドマツオオアブラは、各地の造林地に発生して恒常的な被害を与える害虫であり、エチルチオメトン剤（エカチン）などによる防除は造林の大きな陰路になっている。

病害では、苗畑における立枯病、根腐病（1970年8月、七飯町にて顕著な発生例がみられた。）葉枯病（1971年7月、大野町、アルタナリヤ菌による病害、4-4式ボルドー液施用）などのほか、アブラムシの寄生にともなうスス病が各地に発生している。

カ ラ マ ツ

カラマツは生長が速く、耐寒性のつよい樹種として、造林用のほか各地の屋敷林、防風林、生垣等に用いられている。渡島地方では、森町や鹿部町などの駒ヶ岳火山灰の分布地帯に多いが、この地域の土壌は浮石質のため根を支持する力がよわく、しばしば風倒被害（1975年8月、9号台風ほか）を受け、カラマツヤツバキウイの発生源となっている。この虫には、成虫の穿入期に MEP、EDB 合剤（スミパーク E）20 倍液の散布が有効とされている。その他、葉を食害する著名な害虫として、マイマイガがあげられる。この虫は多食性で 200 種ちかい食物を食害するといわれるが、とくにカラマツを好食し、大発生の際は、夏のうちに全林が落葉したように見える。

病害は、各針葉樹共通の苗畑病害である立枯病や灰色カビ病のほか、昭和 30 年代に道南の海岸風衝地帯の造林地を中心に猛威をふるった先枯病、昭和 40 年代の初めから半ばにかけて各地に流行した落葉病（1971年8月、函館市鉄山）などがある。



写真 - 2 マイマイガの終齢幼虫

（1982，7；森町尾白内）

アカマツ・クロマツ

アカマツ、クロマツなどのマツ類は、古くからわが国の景観を代表する重要な園芸樹種であり、道内でも庭園用緑化樹として、また治山用樹や砂防用としても多く用いられてきた。しかし、天然分布の北限をこえる本道のきびしい環境条件の下では、衰弱木が多いこともあって発生する病害虫も多い。

法定害虫に指定されているマツバナタマバエは、道内では 1971 年に桔梗地区のクロマツで当场が発生を確認したもので、その後も恒常的に各地のマツ類に発生している。防除には成虫羽化期（6月上、中旬頃）、または幼虫の落下期（10~11月）にダイアジノン粉剤を被害枝および地上に散布すれば有効とされている。

マツノシンマダラメイガは、アカマツのほか
—ロoppアカマツなどに恒常的に発生するも
ので、主として枝の付け根の樹幹部に穿入し、
樹脂にさまたげられることなく、材部に孔道を
穿って食害する。生活史がきわめて不規則なこ
ともあって防除が困難な害虫のひとつである。
みつけしだい針金等で刺殺するか、低毒性有機
燐剤の20～50倍液を注入して駆除する。マツ



写真-3 マツカレハの幼虫と蛹
(1978, 7; 函館市桔梗町)

ツアマカシムシは、近年、長万部地方の砂防林や函館市近郊の庭園樹などに継続的に発生し
ているシンクイガの一種で、5・6月頃、生長期の新梢を食害し、8月頃蛹化する。防除には、
浸透性のあるMEP、EDB合剤を用い、食害の初期(5月上旬)に散布するのがよい。マツカレ
ハは、マツの葉を食害する代表的な大蛾類の一種で、函館地方では7月の中、下旬頃蛹化し、
7月下旬から8月上旬にかけて羽化するものが多い。加害の盛期は6・7月頃なので、これより
以前に低毒性有機燐剤(スミチオン)などを用いて防除する。マツノキクイムシは、道南地方
のマツの穿孔性害虫として最もふつうにみられるもので、6月上・中旬頃、マツ林の付近に多
数の越冬成虫が出現し、マツの樹皮下に母孔を穿って産卵する。ふ化した幼虫は漸次食害をつ
づけながら発育し、7月頃に羽化して伸長期を終えた当年枝の髓芯に穿入して加害する。薬剤
散布は、成虫の穿入前後のなるべく早い時期に、浸透性のある有機燐剤を用いて行うことが望
ましい。その他衰弱したマツ類に寄生する二次性の穿孔性害虫としてはマツキボシゾウムシが
多く、吸汁性害虫にはマツノオオアブラ、マツカサアブラムシ、マツアワフキなどがあるが、
これらの被害程度は比較的かるい。

マツ類の病害としては、近年、顕著な増加傾向をしめしているものに皮目枝枯病がある。こ
の病害は、寒乾害などの気象的ないし生理的な原因によって衰弱した木に発生する二次性の病
害で、病原性はそれほどつよくないといわれるが、函館地方では近年とくに被害が多くなり、
毎月5月頃になると枯死した枝葉を携えて相談に訪れる人があとをたたない。この病害はまず
何よりもマツの樹勢を強健に保持して予防することが大切であるが、罹病の際は、6月頃枝の
表面に露出する褐色杯状の子のう盤によって判別されるので、被害部分を切除して焼却する必
要がある。

スギ

道南の主要造林樹種であるスギは、藩政時代から各地の屋敷林、庭園樹、街路樹、生垣等に
利用されてきた。スギは病虫害の比較的少ない樹種とされているが、近年はつぎにのべるよう
な病虫害がいくらか目立ってきている。スギタマバエは道南地方一帯のスギ林に庭常的な被害
を与えている害虫で、新芽の周辺の針葉基部に5・6月頃成虫が産卵し、ふ化した幼虫は微細な

虫こぶをつくって針葉を枯死させる。老熟幼虫は、秋おそく土中に潜って蛹越冬をする。防除法はマツバノタマバエに準じ、羽化期等を正しく把握して薬剤を散布することが肝要である。

スギメムシガモスギタマバエほど多くはないが、道南地方の各地に普通にみられる害虫で、年2世代を経過し、新芽の基部に比較的大きな虫室を営んで内部を食害する。ほとんどの場合前種とともに加害しているため、防除が必要な場合は同時に行う。また、これらの虫ほど恒常的ではないが、夏季、高温で乾燥した気象条件の下に大発生するといわれる害虫にスギノハダニがある。この虫は1977年の7月から8月にかけて、大野平野周辺に大発生して話題になったことがある。被害木は7月頃から針葉の表面が吸汁されてしだいに白色に変わり、やがてうすい茶褐色になって全体に生氣がなくなるが、枯死するまでには至らない。防除にはエチルチオメトン剤等の殺ダニ剤を散布する。

その他の害虫では各地に散見するコウモリガ(1972年8月、函館ほか)や、最近道内における生息が確認されて注目をあつめているスギノアカネトラカミキリ(1980年10月、松前、函館、七飯)がある。この虫の発生地域はいまのところ上記の3個所で、局地的な分布とみられるが、加害形態が枯枝の基部から材部に直接穿入する実質的な累積型の被害であることから、被害の拡散を防ぐことが急務となっている。この虫の道内における生活史は、いまのところあまり明らかでないが、冬期、材内には成虫と幼虫が共存することから、2年で1世代を完了するものとおもわれる。また、成虫の捕獲調査により、函館や松前では6月の上、中旬頃成虫が脱出することも判明している。また、この虫の被害を回避する方法としては、早期に枝打ちを励行することが肝要とされている。

スギの病害としては、立枯病、ペスタロチア病(1971年6月、大野町)などの苗畑病害のほか、近年、海岸部などにしばしば見られる黒粒葉枯病がある。本病罹病木は、夏ごろ樹冠の内側の針葉だけがあざやかな赤紅色に変色し、被害葉には黒色の微細な菌体が多数認められる。しかし枝は枯れないため、樹体が全部枯死することはない。除間伐のねくれた林に多発する傾向のある病害なので、手入れを励行して防除をはかるべき病害である。他に黒点枝枯病、ナラタケ病などが散発している。

(道南支場)



写真-4 スギノアカネトラカミキリの
越冬成虫

(1980, 11; 松前町上川)



写真-5 スギの黒粒葉枯病

(1982, 8; 上磯町茂辺地)